常照
第８５１号

仏教ゆかりの動物
兎（うさぎ）

「とかく（兎角）に人の世は住みにくい」－夏目激石『草枕』冒頭にある有名な一節です。仏典（ぶってん）では「ありえない」「実体がない（空である）」ことを「亀毛（きもう）兎角の如し」と言います。亀の甲羅（こうら）には毛はないし、兎の耳は角ではない。そんなものは存存しない、という意味の漢字がなぜ「あれやこれや」「なにはともあれ」を意味する「とかく」「とにかく」に当てられたのか、辞書を引いても「単なる当て字」としか出てきません。

とにかく、仏教ゆかりの兎といえば「月の兎」でしょう。森で仲良く暮らしていた狐（きつね）と猿（さる）と兎の前に一人の老人が現れ、空腹を訴えます。この老人、実は動物たちの「施（ほどこ）しの心」を試すためにやってきた帝釈天（たいしゃくてん）（インドラ神）の仮の姿でした。

三匹は出かけ狐は川で魚を捕（つか）まえ、猿は木の実を採って来ますが、兎は手ぶらのまま戻りました。そして焚火を起こしてもらうと「私の体を食べてください」と言うなり、炎に飛び込みました。命の布施です。老人は帝釈天の姿に戻り、その徳行を後世に伝えるべく、兎の姿を月輪に残しました。だから月の中には今も兎が見えます。そしてこの兎こそ前世の釈尊（しゃくそん）でした。

ーそういうお話です。

この説話はジャータカ（本生譚ほんじょうたん）すなわち釈尊の前世物語の一篇です。釈尊は折にふれ、自身が過去世で、時には人間、時には鳥獣、時には魚や水生動物に生まれて体験した、浮世の愚かな悲喜劇や、今生（こんじょう）に仏（ほとけ）となるべく重ねてきた修行（菩薩行）について、昔話の形式で語っています。ゆうに五百篇を超える説話が残っております。

ジャータカは、僧院で師資相承（ししそうじょう）された経典（きょうてん）と異なり、釈尊ゆかりの地に伝わる民間伝承や、民衆布教（ふきょう）のため創作された寓話（ぐうわ）が元となっています。月の兎はインド古来の伝説で、それが仏教説話となり、様々に潤色（じゅんしょく）されながらシルクロードを渡りました。先ほど紹介した兎のジャータカは、三蔵法師（さんぞうほうし）として知られる唐（とう）の玄奘（げんじょう）が中国に伝えたものです。（『大唐西域気』巻七）。これが『今昔物語』（巻五）の手本となり、わが国にも広く知られるようになりました。

月の兎は、月面の白い斜長岩（しゃちょうがん）と黒い玄武岩（げんぶがん）が生み出した模様で、ジャータカは釈尊という希有（きう）な人格から派生した想像の物語です。どちらも亀毛兎角の如く実体のないものですが、それでも人々は今なお、夜空の月に兎の姿を認め、生命の不思議を想います。

仏教ゆかりの動物
鹿（しか）

釈尊（しゃくそん）が初めて説法

を行った場所は鹿野園（ろくやおん）鹿の園と呼ばれています。かつてこの地で狩猟を楽しもうとした王を、林に住む鹿の王が説得し、無意味な殺戮（さつりく）を思いとどまらせました。しかし代わりに鹿たちは、日々の食肉を王に供することを約束しました。以来、鹿たちは毎日一頭ずつ、王の食膳に上がるために命を落としました。

ある日、妊娠中の牝鹿（めじか）に犠牲の順番が回ってきました。しかし、お腹の子供の命が奪われることを嘆く母鹿を見た鹿王は、自らが身代わりとなって城へ赴きました。人間の王は驚き、鹿王の徳の高さに深く恥じ入り、以降は殺生（せっしょう）を慎みました。こうしてこの地は鹿たちの楽園、鹿野園になったということです。

この物語は前回の「月の兎（うさぎ）」の話と同様、釈尊の前世物語（ジャータカ）のひとつで、慈悲深い鹿の王こそ、前世の釈尊であったとされています。右のあらすじは中国所伝に拠りますが（『大唐西域記』巻七）、東南アジア版には後日談があります（『ジャータカ』第十二話「ニグローダ鹿本生」）。自由を得た鹿たちは解放感のあまり、やがて農地の作物までも食い荒らすようになります。そこで鹿の王がみなをたしなめ、以後、鹿たちは人間が目印を付けた田畑には出入りしないようになった、ということです。「共生」という言葉のお手本のような話です。

「ルル鹿本生」もたいへん有名な物語です（『ジャータカ』第四八二話）。借金まみれになった長者の放蕩（ほうとう）息子が、思い余ってガンジス河に身投げしますが、死にきれず、溺（おぼ）れて助けを求めます。近くのマンゴー林に隠棲（いんせい）していた、ルルという名の

全身金色の大鹿（前世の釈尊）は、男の悲鳴を聞いて河に飛び込み、背に乗せて助けます。礼を言う男にルル鹿は、自分がこのマンゴー林に住んでいることは誰にも言わないよう口止めします。男は約束しますが、町に戻り、王が金色の大鹿に莫大（ばくだい）な懸賞金をかけていると知ると、城へ行き密告します。マンゴー林へ向かった王は、求めていたルル鹿と会って話を聞くと捕獲をあきらめ、裏切り者の男には、賞金の代わりに罰を与えました。

インドを中心に生息するアクシス鹿は「世界一美しい鹿」と讃（たた）えられましたが、ゆえに人間から狩りの対象とされました。仏教説話に出てくる鹿たちはみな、人間の身勝手な振る舞いに傷ついても、その美しい姿にふさわしい高潔な態度は微塵（みじん）もゆるがず、身をもって生命の尊厳を示しています。

十二月の常例布教（ご法話）のご案内

○前　期　十二月七日（土）～十一日（水）

講師　未定

○後　期　十二月十三日（金）～十六日（月）

講師　未定

○場　所　小樽別院内

○時　間　午後二時（法要終了後）～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。
どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院くださいますようお待ちしております。

発行所
〒047-0017
小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
電話（〇一三四）二二一〇七四四番
FAX　二二九一四〇八〇番
テレホン法話　二二七一一六一六番